

平成 21 年度 文部科学省 委託調査研究

学力調査を活用した
専門的な課題分析に関する調査研究

C . 読書活動と学力・学習状況の関係に関する調査研究

分析報告書

静岡大学

はじめに

本調査研究は、データの詳細で広範囲な分析を行い、読書指導や学校図書館を活用した授業に力を入れている先生方の、疑問や期待に答えることを目的としている。読書指導や学校図書館を活用した授業に熱心な先生方は、自分の経験に基づいて信念を持って取り組んでいる。しかし、管理職や同僚あるいは保護者に対して、読書や学校図書館の重要性を説得する客観的なデータを持ってはいなかった。

読書と学力の関連性については、さまざまな考え方がある。それでも、教科には関係なく単に頭がよいということと読書との関係については、その関係を否定する人は少ないだろう。しかし、それと比べれば、具体的な教科の学力との関係については、懐疑的なものが多いと思われる。たとえば、

- ・ テレビを見たりゲームをしたりするよりはよいが、それよりは勉強した方がよい
- ・ 国語の学力とは関係があるかもしれないが、算数・数学とは関係がない
- ・ 小学校までならともかく、内容が高度になる中学校では関係はなくなる

などである。

こういった考え方には、明確な根拠があるわけではないが、それを肯定するにせよ否定するにせよ、具体的なデータはこれまでほとんど出されていなかった。

今回の調査研究の目的は、このような問題に明確な根拠を持って答えることである。それにより、教育関係者が読書指導や学校図書館の活用に根拠を持って取り組めるようになることが、私の願いである。

今回の委託調査研究においては、本データ分析とは別に、学校図書館を活用して学力向上に成果をあげている実践校を訪問し、『学校図書館活用ハンドブック 学力向上のための読書活動』を作成した。根拠となるデータと具体的な実践例により、我が国の読書指導や学校図書館の活用が一層発展することを願う。

研究責任者 村山 功

目次

はじめに

調査の概要	1
分析に用いる変数	2
第 部 教科の学力に対する 1 要因の関係	5
補足分析 - A 教科の学力と平均読書時間・図書館利用頻度	13
補足分析 - B 読書好きと平日読書時間	15
補足分析 - C 学力層 D における長時間読書児童生徒	18
第 部 教科の学力に対する 2 要因の複合的關係	21
補足分析 - A 平日学習時間と平日読書時間	26
補足分析 - B 学校司書等の影響	34
補足分析 - C PISA 型読解力の育成	37
第 部 教科の学力に対する構造的関係	41
補足分析 - A 地域規模・学校規模の影響	48
第 部 読書時間と記述式問題の正答・誤答・無解答の關係についての分析	55
結論	71
学校への提言	72

別表

調査の概要

目的

全国学力・学習状況調査のデータを分析し、読書活動や学校図書館の活用と教科の学力との関係を明らかにする。

対象

「平成 21 年度¹ 全国学力・学習状況調査」のデータのうち、国公立学校に在籍し、4 月 21 日に 4 科目の学力調査と児童 / 生徒質問紙のすべてに回答した者(小学生 1,144,548 名、中学生 1,072,481 名)を対象とする。

第 部のみ、平成 19 年度から平成 21 年度までの 3 年間のデータを対象とする²。

方法

1) 児童 / 生徒質問紙から、

- ・児童生徒の読書活動に関連した項目(読書活動変数)
- ・児童生徒の学習活動に関連した項目(学習活動変数)

を抽出する。

2) 学校質問紙から、

- ・学校図書館への人の配置や読書活動に関連した項目(読書環境変数)
- ・読書や学校図書館等に関わる学習指導に関連した項目(指導方法変数)

を抽出する。

3) これらの項目に対する回答と、国語及び算数 / 数学の学力調査の結果との関係を分析する。

¹ 児童 / 生徒質問紙において図書館利用頻度を尋ねる設問があるのは平成 21 年度のみであり、平成 19・20 年度との比較ができないため。

² 実施当日に記述式問題が含まれる科目と児童 / 生徒質問紙に回答した児童生徒を対象とした。

調査の概要

分析に用いる変数

平成 21 年度全国学力・学習状況調査の学力調査の結果を、教科の学力を表す指標と考え、これを分析の目的変数とした。学力調査の結果は主として各科目ごとの正答数を用いるが、分析の目的によっては領域別や問題形式別の正答数を用いることもある。

児童 / 生徒質問紙の質問項目から、児童生徒の読書活動に関するもの、学習活動に関するものを抽出し、それぞれ読書活動変数、学習活動変数とした。また、学校質問紙の質問項目から、読書環境に関するもの、読書や学校図書館との関連の深い学習指導方法に関するものを抽出し、それぞれ読書環境変数、指導方法変数とした。

以上から、4 つの説明変数により目的変数を説明するという分析枠組みとなる。

目的変数	説明変数	
	個人変数	学校変数
教科の学力	読書活動変数 学習活動変数	読書環境変数 指導方法変数

以下、各変数に対応する学力調査、児童 / 生徒質問紙および学校質問紙の項目を示す。

1. 目的変数

教科学力（学力調査）

科目	項目
国語 A、国語 B、算数 / 数学 A、算数 / 数学 B	正答数

教科学力詳細（学力調査）

科目	項目	備考
国語 A 国語 B 算数 / 数学 A 算数 / 数学 B	正答数	一部学力層別
	領域別正答数	
	問題形式別正答数	
	問題形式別無解答数	

「第 部 1) 教科の学力と児童生徒の読書活動」の分析でのみ使用

2. 説明変数

1) 個人変数

a. 読書活動変数（児童／生徒質問紙）

番号	項目	選択肢数
(19)	家や図書館で、ふだん（月曜日から金曜日）1日あたりどれくらいの時間、読書をしますか。（教科書や参考書、漫画や雑誌は除きます。）【平日読書時間】	6
(20)	昼休みや放課後、学校が休みの日に、本を読んだり、借りたりするために、学校図書館・学校図書室や地域の図書館へどれくらい行きますか。（教科書や参考書、漫画や雑誌は除きます。）【図書館利用頻度】	5
(55)	読書は好きだ。【読書好き】	4

【】内は省略時の表記

b. 学習活動変数（児童／生徒質問紙）

番号	項目	選択肢数
(26)	自分で計画を立てて勉強をしている。【計画的な勉強】	4
(27)	学校の宿題をしている。【学校の宿題】	4
(28)	学校の授業の予習をしている。【学校の予習】	4
(29)	学校の授業の復習をしている。【学校の復習】	4
(30)	苦手な教科の勉強をしている。【苦手な教科の勉強】	4
(31)	テストで間違えた問題について、間違えたところを後で勉強している。【間違えた問題の振り返り】	4
(57)	国語：国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている。【国語：目的に応じた読み書き】	4
(60)	国語：国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとまりごとに内容を理解しながら読んでいる。【国語：段落ごとの内容理解】	4

【】内は省略時の表記

調査の概要

2) 学校変数

a. 読書環境変数 (学校質問紙)

番号	項目	選択肢数
[20]	司書教諭が置かれている【司書教諭】	2
[21]	学校図書館図書標準が達成されている【図書標準】	2
[22]	あなたの学校には、教員以外の職員で学校図書館に関する業務を担当する職員(いわゆる「学校司書」など)が置かれていますか。(ボランティアは除きます。) 【学校司書】	4
[23]	「朝の読書」などの一斉読書の時間を設けましたか。【一斉読書の時間】	6
[24]	学校図書館を活用した授業を計画的に行いましたか。【学校図書館活用授業】	5

【】内は省略時の表記

b. 指導方法変数 (学校質問紙)

番号	項目	選択肢数
[34]	児童/生徒に対して、本やインターネットなどを使った資料の調べ方が身に付くよう指導している。【資料の調べ方の指導】	4
[35]	児童/生徒に対して、資料を使って発表ができるよう指導している。 【資料を使った発表の指導】	4
[36]	児童/生徒が自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導をしている。【調べたことを書かせる指導】	4
[60]	国語：様々な文章を読む習慣を付ける授業 【国語：様々な文章を読む授業】	4

【】内は省略時の表記

()で囲んだ番号は児童/生徒質問紙、[]で囲んだ番号は学校質問紙の質問番号を表す。

選択肢は以下のように省略して表記する。

肯定	「当てはまる」「している」など
やや肯定	「どちらかといえば、当てはまる」「どちらかといえば、している」など
やや否定	「どちらかといえば、当てはまらない」「あまりしていない」など
否定	「当てはまらない」「全くしていない」など

第 部 教科の学力に対する 1 要因の関係

目的

児童生徒の読書活動や学習活動、学校の読書環境や指導方法が、教科の学力に対して単独でどのような関係にあるかを明らかにする。児童生徒の読書活動に関しては、その影響を詳細に見る。

方法

読書活動変数、学習活動変数、読書環境変数、指導方法変数に含まれる各質問項目に対し、選択肢ごとの平均正答数をすべての科目において求め、質問項目への回答と教科の学力との関係を分析する。

また、読書活動変数については、その影響を詳細に分析するため、科目ごとの正答数だけでなく、領域別正答数、設問形式別正答数、設問形式別無解答数についても集計を行う。正答数については学力層¹別の分析も行い、影響が学力層によって異なるかどうかを見る。

目的変数		説明変数
教科学力 (科目別)	正答数(全体及び学力層別) 領域別正答数 問題形式別正答数 問題形式別無解答数	読書活動変数
	正答数	学習活動変数
		読書環境変数
		指導方法変数

結果

表数が多いため、すべての結果は別表 - 1 - 1 a ~ - 4 a に示す。ここでは、表から読み取れる結果についてのみ示し、必要に応じてグラフ等を記載する。

¹ 学力層は、学力調査のそれぞれの科目において、本調査の集計対象となった児童生徒全員の正答数分布の状況から四分位により分類し、正答数の高い順に、学力層 A、学力層 B、学力層 C、学力層 D としたものである。

第 部 教科の学力に対する 1 要因の関係

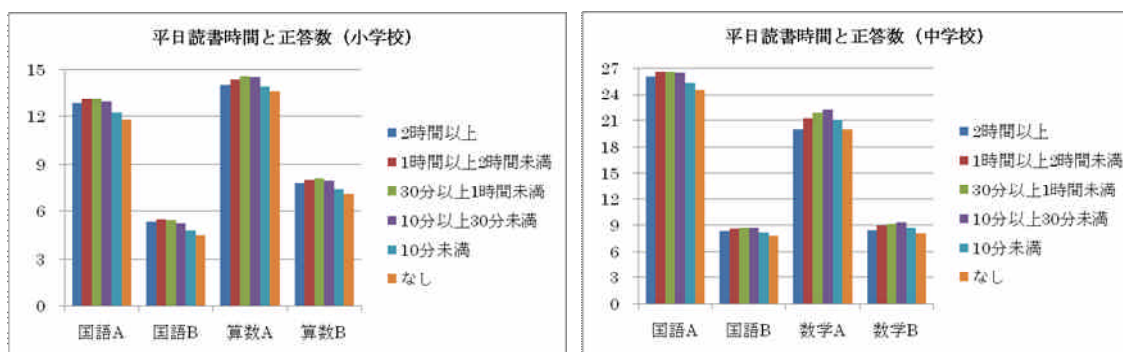
1) 教科の学力と児童生徒の読書活動

a. 正答数

ア. 正答数と平日読書時間

図 - 1 に示したように、平日読書時間により児童生徒の平均正答数は異なる。平日読書時間が長いか短い児童生徒は、どの科目においても正答数は高くない。

図 - 1 教科の学力と平日読書時間の関係



学力層別に見ると、学力層 A ~ 学力層 C の児童生徒では、平日読書時間による正答数の差はほとんどない（学力層 A ~ C は、学力層 D と比較して層内での正答数の差が小さいことにも注意）。一方、学力層 D においては、平日読書時間の最も長い児童生徒は、ほとんどの科目において正答数が最低である。

図 - 2 学力層別の教科の学力と平日読書時間の関係例

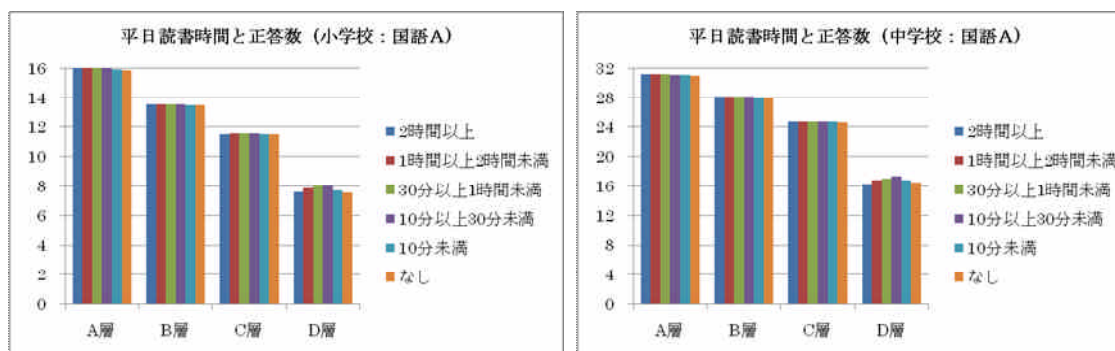


図 - 2 を見ると学力層 A ~ C では平日読書時間の影響はほとんどなく、図 - 1 の結果は主として学力層 D の影響であることがわかる。

イ．正答数と図書館利用頻度

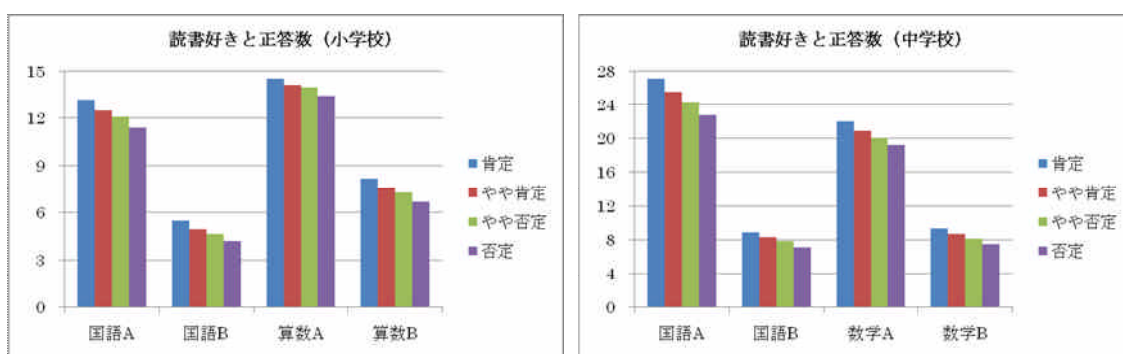
図書館利用頻度により、児童生徒の平均正答数は異なる。図書館利用頻度の最も高い児童生徒は、どの科目においても教科学力の正答数は低い。

学力層別に見ると、ここでも学力層 A～C の児童生徒では、図書館利用頻度による正答数の差はほとんどない。一方、学力層 D においては、図書館利用頻度の高い児童生徒は、どの科目においても正答数が最低である。つまり、平日読書時間と同様、図書館利用頻度と教科の学力との関係は、主として学力層 D の関係を反映している。

ウ．正答数と読書好き

図 - 3 に示したように、読書好きの度合いにより、児童生徒の平均正答数は大きく異なる。どの科目のどの学力層においても、読書好きの児童生徒ほど正答数が高い。

図 - 3 教科の学力と読書好きの関係



これらをまとめると、教科の学力と読書好きとは強い関係が見られる。一方、平日読書時間と図書館利用頻度の場合には、読書時間の長い者や利用頻度の高い者は必ずしも教科の学力が高くない。ただし、学力層 A～C においては平日読書時間と図書館利用頻度によらず正答数はほぼ等しく、この結果は主として学力層 D の影響である。

b．領域別正答数

ア．領域別正答数と平日読書時間

小学校国語では 1 時間以上 2 時間未満、小学校算数及び中学校国語 A では 30 分以上 1 時間未満、中学校国語 B 及び中学校数学では 10 分以上 30 分未満の平日読書時間の場合に、多くの領域で平均正答数が最も高かった。

平日読書時間の最も長い児童生徒は、概ね小学校国語、中学校国語及び小学校算数のどの領域においても、正答数は最高ではないが平日読書時間が 10 分未満（なしを含む）

第 部 教科の学力に対する 1 要因の関係

よりは正答数が高い。しかし、中学校数学では、どの領域においても正答数は最低に近い。

イ．領域別正答数と図書館利用頻度

小学校国語では週に 1 ～ 3 回の利用、それ以外では月に 1 ～ 3 回の利用の場合に、多くの領域で平均正答数が最も高かった。

図書館利用頻度が最も高い児童生徒は、小学校では多くの領域において、中学校ではすべての科目のすべての領域において、図書館を利用しない児童生徒を除けば正答数は最も低い。

ウ．領域別正答数と読書好き

読書好きの児童生徒は、どの科目のどの領域においても、正答数は最も高い。

教科の学力と児童生徒の読書活動の関係においては、領域による顕著な差異は見られず、正答数全体と同じ傾向であった。領域によらず、読書好きは教科の学力と良好な関係を示したが、最長読書者、最頻図書館利用者は教科の学力が高くなかった。

c．問題形式別正答数

ア．問題形式別正答数と平日読書時間

平日読書時間の最も長い児童生徒は、概ねどの科目のどの問題形式においても、正答数は最高ではないが平日読書時間が 10 分未満（なしを含む）よりは正答数が高い。

イ．問題形式別正答数と図書館利用頻度

図書館利用頻度が最も高い児童生徒は、どの科目のどの問題形式においても、図書館を利用しない児童生徒を除けば正答数は最も低い。

ウ．問題形式別正答数と読書好き

読書好きの児童生徒は、どの科目のどの問題形式においても、正答数は最も高い。

教科の学力と児童生徒の読書活動の関係においては、問題形式による顕著な差異は見られず、正答数全体と同じ傾向であった。問題形式によらず、読書好きは教科の学力と良好な関係を示したが、最長読書者、最頻図書館利用者は教科の学力が高くなかった。

d. 問題形式別無解答数

ア. 問題形式別無解答数と平日読書時間

無解答数が最も少ないのは、小学校 30 分以上 1 時間未満、中学校では 10 分以上 30 分未満であった。

また、小学校で平日読書時間の最も長い児童は、平日読書時間が 10 分未満(なしを含む)の児童よりは無解答数が少ない。一方、中学校で平日読書時間の最も長い生徒は、読書をまったくしない生徒に次いで無回答数が多く、特に数学 A では最も多い。

イ. 問題形式別無解答数と図書館利用頻度

図書館利用頻度が最も高い児童生徒は、無解答数の多さにおいて図書館を利用しない児童生徒と一二を争う。

ウ. 問題形式別無解答数と読書好き

読書好きの児童生徒は、どの科目のどの問題形式においても、無解答数は最も少ない。

教科の学力と児童生徒の読書活動の関係においては、問題形式による無解答数に顕著な差異はなく、正答数全体と同じ傾向であった。問題形式によらず、読書好きは無解答数が少なかったが、最長読書者、最頻図書館利用者は無解答数が少なくなかった。

2) 教科の学力と児童生徒の学習活動

どの科目においても、学習活動変数に対応する 8 つの質問項目のすべてにおいて、肯定的な回答をした児童生徒ほど、平均正答数が高くなっている。その中でも、回答による平均正答数の差が顕著な質問項目は、以下の通りである。

小学校

(26) 計画的な勉強

(57) 国語：目的に応じた資料の読み書き

(60) 国語：段落ごとの内容理解

中学校

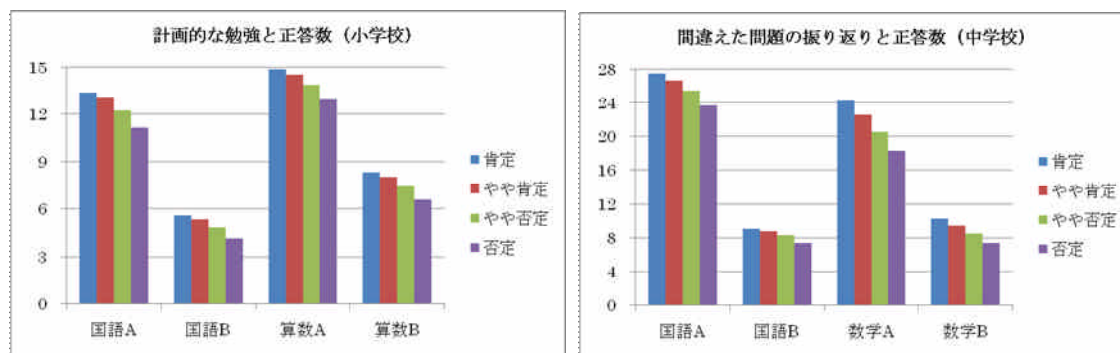
(31) 間違えた問題の振り返り

(60) 国語：段落ごとの内容理解

代表的な例を図 - 4 に示す。なお、学校の宿題をしているかどうかも回答によって平均正答数に大きな差があるが、これは否定的な回答をした児童生徒が少なく、かつその児童生徒の正答数がかかなり低いことによるもので、全体的な傾向を示すとはいえない。

第 部 教科の学力に対する 1 要因の関係

図 - 4 教科の学力と学習活動の関係例



3) 教科の学力と学校の読書環境

学校の読書環境による教科の学力の差はほとんど見られなかった。

4) 教科の学力と学校の指導方法

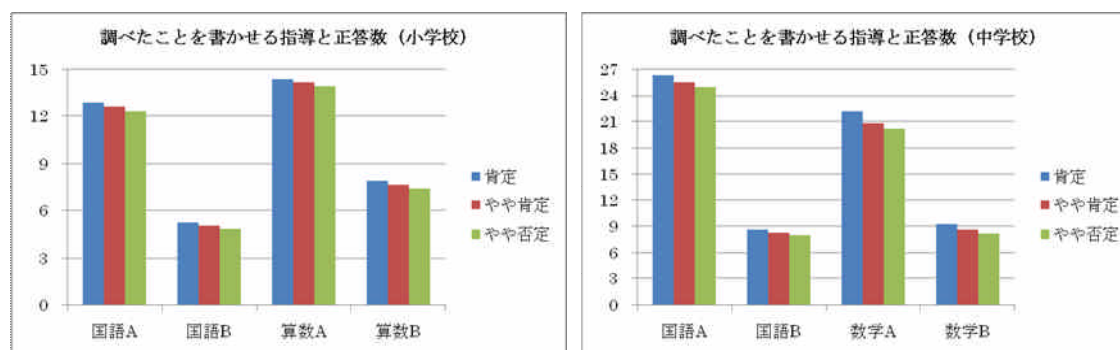
指導方法に関する設問では、まったく行っていないとする回答はわずかであり、ここでは分析の対象とはしない。これを除いて検討すると、どの科目においても、指導方法変数に対応する4つの質問項目のすべてにおいて、肯定的な回答をした学校にいる児童生徒ほど平均正答数が高くなっている。その中でも、回答による平均正答数の差が顕著な質問項目は、

小学校・中学校

[36] 調べたことを書かせる指導

となっている。これを図 - 5 に示す。前述したように、まったく行っていないと回答した学校に属している児童生徒のデータは除外した。

図 - 5 教科の学力と学校の指導方法の関係例



考察

教科の学力と児童生徒の読書活動について

読書好きな児童生徒ほど教科の学力が高い。科目、学力層、領域、設問形式によらずこの傾向が確認できるという意味で、これは非常に強固な傾向であるといえる。この強固さが確認できたことは、今回の調査研究における重要な知見の一つと考えられる。

これに対し、平日読書時間も教科の学力と一定の関係を示すが、長時間読書が必ずしも教科の学力に結びついていない。図書館利用頻度についても、同様である。ただし、これらの結果は主として学力層 D の児童生徒の影響であり、学力層 A ~ C では平日読書時間や図書館利用頻度による教科の学力の差はほとんどない。このことから、学力層 D の児童生徒の読書や図書館利用の内容に問題があることが推測される。

以上のように、教科の学力に対して読書好きが強い傾向を示したのに対し、平日読書時間や図書館利用頻度がそれほどはっきりした傾向を示していないことについて、いくつかの疑問が生じる。

- ・ 平日読書時間や図書館利用頻度は、教科の学力と関連していないのか。
- ・ 読書好きと平日読書時間で異なる傾向を示したことは、読書好きと平日の読書時間とはどういう関係にあるのか。
- ・ 学力層 D の平日読書時間が長い児童生徒の低学力の原因は何か。

以上の疑問については、この後の補足分析 - A ~ C で扱う。

教科の学力と児童生徒の学習活動について

教科の学力と児童生徒の学習活動には、明確な関係が見られた。特に、国語の授業において段落ごとの内容理解に努める児童生徒の教科の学力が高いことは、小学校と中学校に共通している。

また、意図的な学習活動としては、小学生では計画的な勉強が、中学生では間違えた問題の振り返りが、教科の学力に対する関連が強い。このことは、小学生では一般的な学習習慣の定着が、中学生ではさらに意図的な学習方法の確立が重要であることを示唆している。

教科の学力と学校の読書環境について

学校の読書環境は、それ単独では教科の学力との関連がほとんどみられない。読書環境はあくまでも環境であり、そこで学習指導や読書活動・学習活動が行われたときに、その効果を強めたり弱めたりするものと考えられる。このような要因間の複合的な関係については第部で扱う。

第 部 教科の学力に対する 1 要因の関係

教科の学力と学校の指導方法について

教科の学力と学校の指導方法には、明確な関係が見られた。ただし、設問で挙げられているような指導を全く行っていない学校はほとんどないため、実質的に選択肢が 3 つとなり、指導方法による差が出にくくなった可能性がある。

補足分析 - A 教科の学力と平日読書時間・図書館利用頻度

目的

先に行った分析において、平日読書時間や図書館利用頻度に関しては、教科の学力と強固な関係を示す読書好きとは異なり、長時間読書をする児童生徒や頻繁に図書館を利用する児童生徒が、必ずしも教科の学力が高くなかった。また、A～Cの各学力層の中では、平均正答数にはほとんど差が見られなかった。このことは、平日読書時間や図書館利用頻度が教科の学力にあまり影響しない可能性を示唆している。このため、教科の学力と平日読書時間・図書館利用頻度の関係について、改めて検討する。

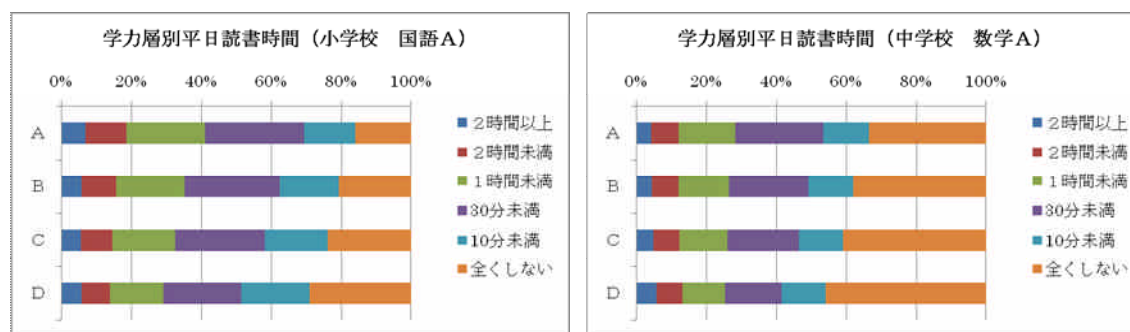
方法

先に行った分析では、選択肢ごとの平均正答数を比較した。ここでは観点を換え、選択された選択肢の割合を学力層別に比較することにより、教科の学力と平日読書時間・図書館利用頻度の関係を見る。

結果

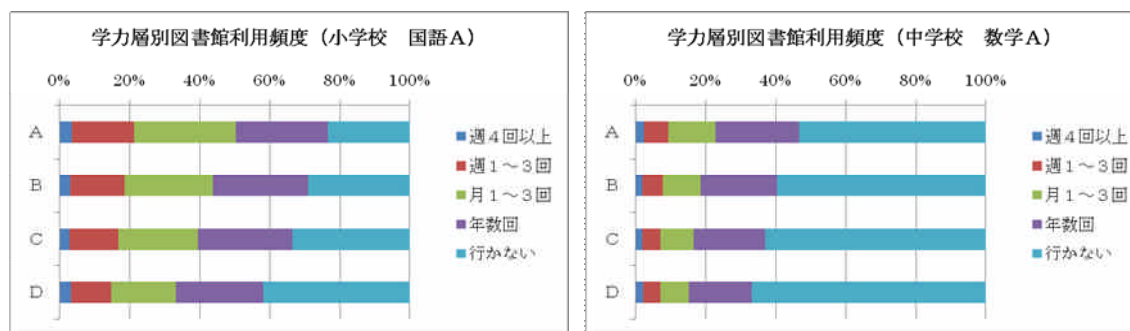
結果を別表 - A - 1～6 に示す。その中から代表的なものをグラフに示した（図 - A - 1, 2）。学力層別にこれらの設問への回答の比率を見ると、教科の学力が高い層の方が概ねどの項目も読書に対して肯定的な回答が多いことがわかる。

図 - A - 1 学力層別平日読書時間



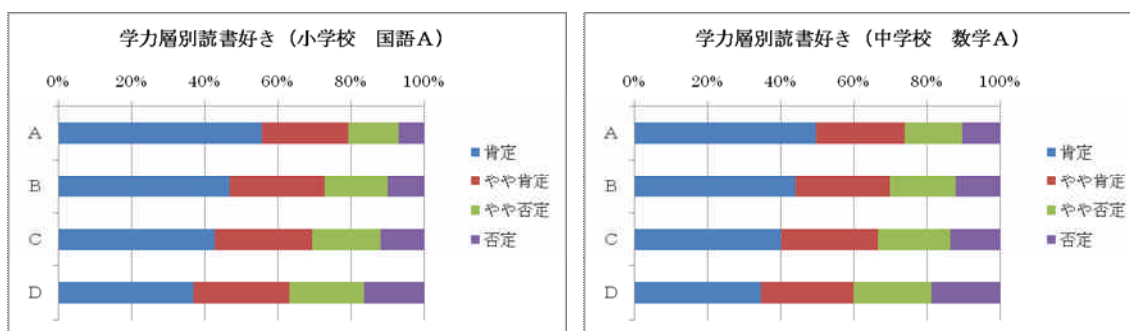
第 部 教科の学力に対する 1 要因の関係

図 - A - 2 学力層別図書館利用頻度



比較のために、学力層別の読書好きの割合を示す。

図 - A - 3 学力層別読書好き



考察

平日読書時間と図書館利用頻度は、同じ学力層内で比較すると教科の学力への影響が見られないが、学力層間で比較すると教科の学力とある程度関係があることが示された。ただし、中学校の図書館利用頻度はかなり低い。

図 - A - 1 によれば、平日に 10 分以上の読書を行っているかどうか、教科の学力に影響を与えている。また、教科の学力の高い層ほど、小学校では 10 分以上 2 時間未満、中学校では 10 分以上 1 時間未満の読書をしている児童生徒の割合が多い。このことから、限られた読書時間の中で読書の質を高めるような指導の必要性が示唆される。

補足分析 - B 読書好きと平日読書時間

目的

先に行った分析において、教科の学力との関係が強固な読書好きとは異なり、平日読書時間に関しては長時間読書をする児童生徒が必ずしも教科の学力が高くなかった。このことは、読書好きと回答した児童生徒が必ずしも読書時間が長くなかった可能性を示唆している。このため、読書好きと平日読書時間との関係について検討を行う。

方法

小学校と中学校のすべての科目において、読書好きと平日読書時間の回答を組み合わせ、学力層別に児童生徒数を集計する。

結果

読書好きと回答した児童生徒の平日読書時間について、代表的なものをグラフに示す（図 - B - 1, 3）。図 - B - 3 において顕著に見られるように、学力層が低くなるとともに読書好きの生徒の中で、2 時間以上読書する生徒と 10 分未満もしくは全く読書しない生徒が増加していく。小学校では、2 時間以上読書する児童の増え方は、中学校ほど大きくない。

この変化を明確に示すため、学力層間の変化が最も大きい読書時間として、小学校では 10 分以上 2 時間未満、中学校では 10 分以上 1 時間未満を選び、その児童生徒の割合を学力層別に示した（図 - B - 2, 4）。このグラフから、教科の学力の高い児童生徒は、限られた読書時間の中で質の高い読書活動を行っていることが推測される。

図 - B - 1

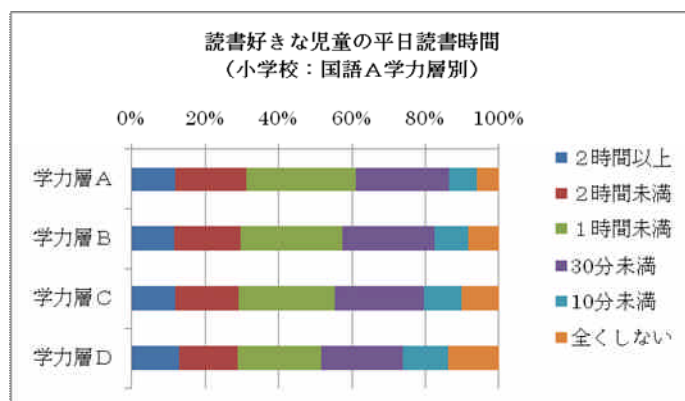
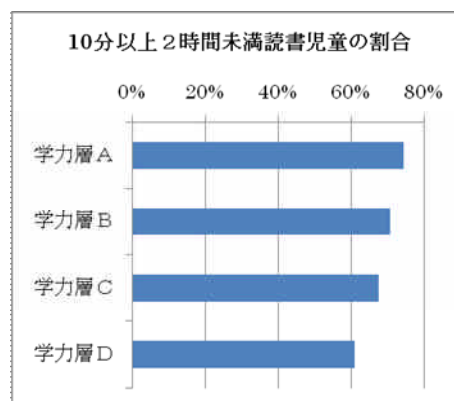


図 - B - 2



第 部 教科の学力に対する 1 要因の関係

図 - B - 3

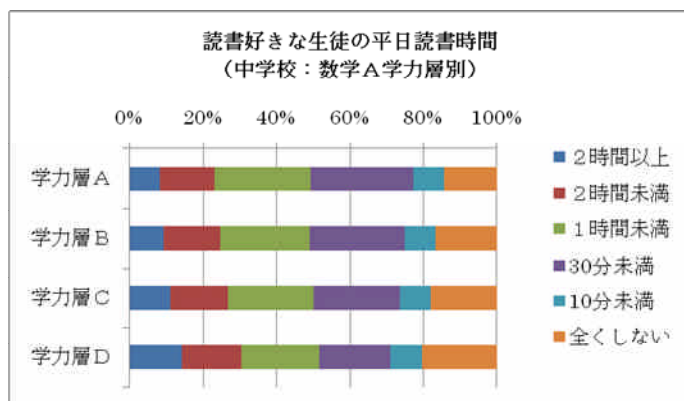
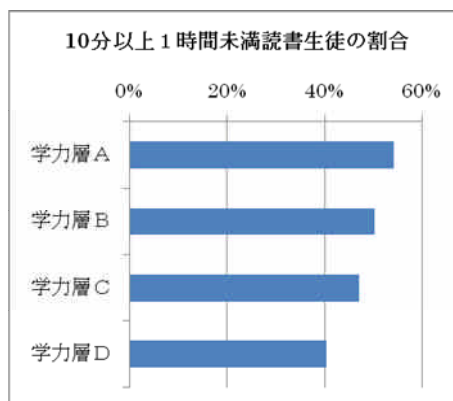


図 - B - 4



これを確認するために、すべての科目において読書好きの児童生徒を対象に、平日読書時間と計画的な勉強の学力層別クロス集計を行った。

まず、小学校国語Aの結果を図 - B - 5 ~ 8 に示す(凡例は図 - B - 1 と同じ)。図 - B - 5 ~ 8 から明らかなように、どの学力層でもほぼ同じ傾向を示している。読書好きな

図 - B - 5

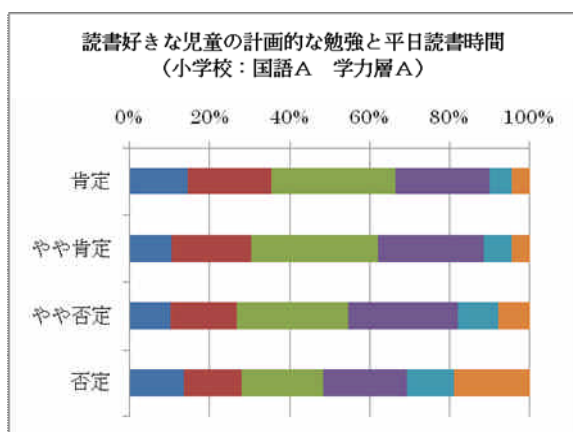


図 - B - 6

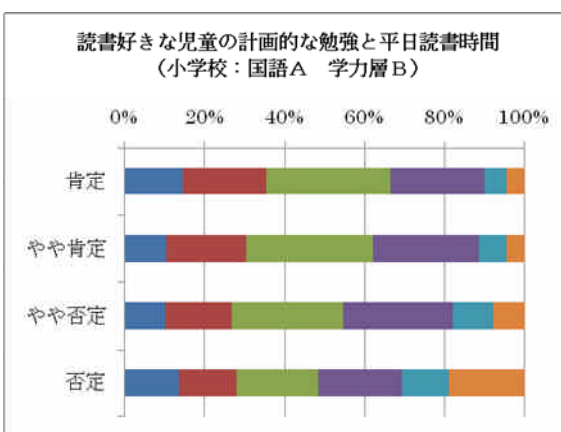


図 - B - 7

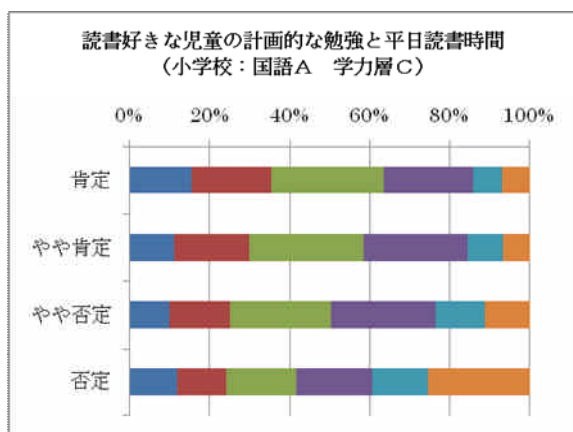
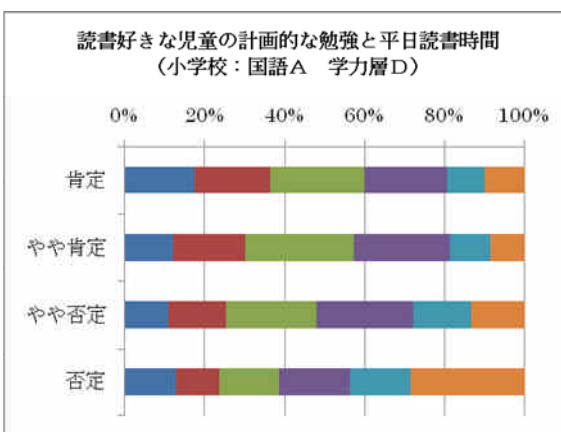


図 - B - 8



児童は、計画的に勉強できない児童ほど読書時間がとれていない。また、計画的な勉強ができない児童の一部に、長時間読書をしてしまう傾向が見られる。これを除けば、計画的に勉強している児童ほど、できるだけ長く読書時間を確保している。

次に中学校の結果を図 - B - 9 ~ 12 に示す。これを小学校と比較すると、中学校でもおおよその傾向は一致しているが、小学校と比較するとその傾向は弱い。

図 - B - 9

図 - B - 10

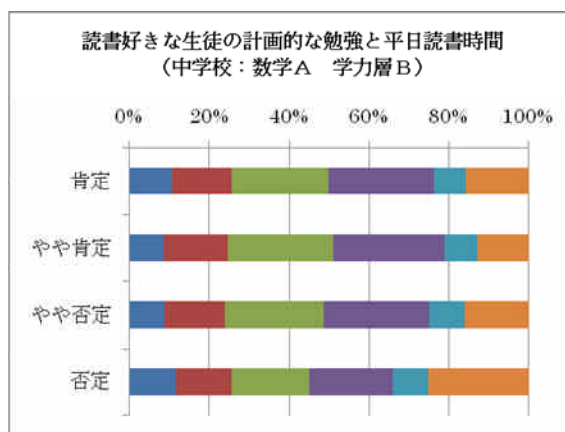
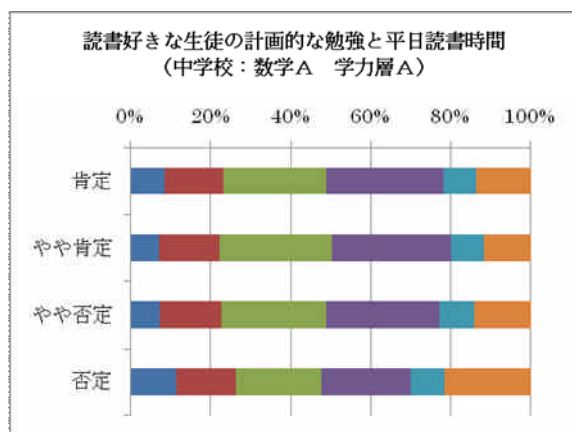
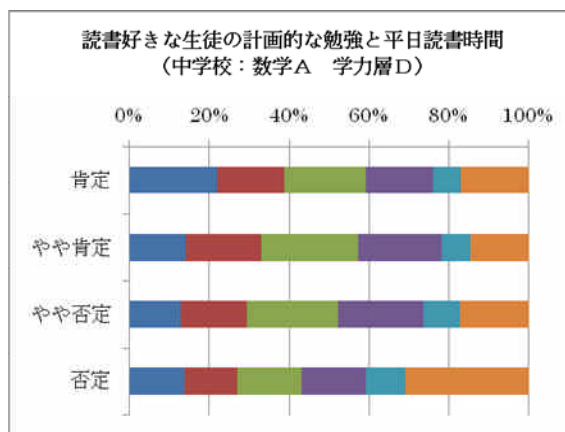
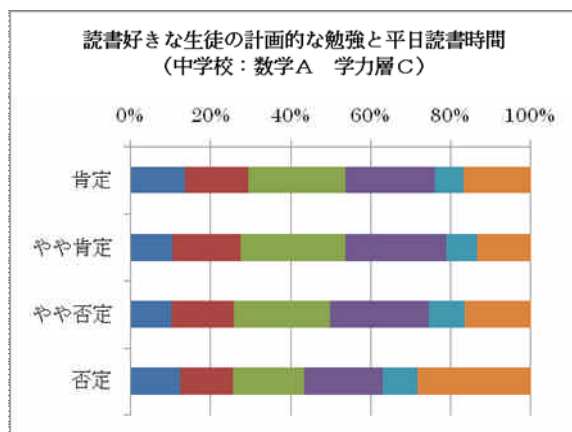


図 - B - 11

図 - B - 12



考察

これらの結果から、教科の学力が高く、読書が好きな児童生徒は、必ずしも長時間ではないもののある程度の読書を行っていることがわかる。また、教科の学力が高く、読書が好きな児童生徒については、小学生では計画的に勉強している児童ほど読書時間を長く取っているが、中学生になるとその傾向が弱くなっている。

これらのことから、教科の学力の高い読書好きの児童生徒は、平日の時間を計画的に使って読書の時間を意識的に生み出していることが推測される。

第 部 教科の学力に対する 1 要因の関係

補足分析 - C 学力層 D における長時間読書児童生徒

目的

長時間の読書は教科の学力向上に最も適しているわけではないが、学力の高い児童生徒ほど平日に読書を行っている（補足分析 - A , - B ）。一方、学力層 D の中にも平日に長時間読書を行う児童生徒は存在する。このように長時間読書をしながらも教科の学力の低い児童生徒の特徴について分析する。

方法

学力層 D に含まれる長時間読書を行う児童生徒が、平日の時間をどう使っているかを検討する。ただし、この方法には 2 つ問題がある。

第一に、児童 / 生徒質問紙では、平日の時間の使い方について、睡眠、テレビ等、ゲーム等、インターネット、勉強、読書の 6 項目で尋ねている。そのため、たとえば楽器等の習い事やスポーツに長時間費やしている児童生徒は捕捉できない。

第二に、ここで対象としている低学力児童生徒は、そうでない児童生徒と比べて毎日を規則的に過ごしているとは考えられず、その時々興味で時間を睡眠・テレビ等・ゲーム等・インターネット・読書のどれかに割り振っていると想像できる。

このような前提から、読書と他の活動に長時間費やしている児童生徒の比率を、国語 A の学力層 D と学力層 A の児童生徒、児童生徒全体との間で比較することとした。

結果

結果は、表 - C - 1 , 2 の通りである。

表 - C - 1 平日 2 時間以上読書を行っている児童

読書以外の活動時間	学力層 D	学力層 A	全体
(11) 睡眠時間が 10 時間以上	20.2%	9.7%	13.5%
(12) テレビ等の視聴が 4 時間以上	35.7%	17.9%	25.5%
(13) ゲーム等の時間が 4 時間以上	18.5%	3.8%	9.0%
(14) インターネットの時間が 4 時間以上	6.9%	2.7%	4.2%
(16) 勉強時間が 3 時間以上	16.5%	29.3%	22.5%

表 - C - 2 平日 2 時間以上読書を行っている生徒

読書以外の活動時間	学力層 D	学力層 A	全体
(11) 睡眠時間が 10 時間以上	11.8%	2.6%	5.3%
(12) テレビ等の視聴が 4 時間以上	35.8%	14.7%	22.8%
(13) ゲーム等の時間が 4 時間以上	23.4%	7.6%	13.2%
(14) インターネットの時間が 4 時間以上	18.0%	9.9%	13.0%
(16) 勉強時間が 3 時間以上	20.2%	17.4%	17.6%

上記の表から、以下のことがわかる。

- ・学力層 D の小学校児童の場合、勉強を除くどの項目も長時間行っている児童が多い。
- ・学力層 D の中学校生徒の場合、勉強も含めどの項目も長時間行っている生徒が多い。
- ・中学生になると、ゲームやインターネットに長時間費やす者が増加する。

考察

学力層 D の中でも長時間読書を行う児童生徒は存在するが、これらの児童生徒は同時に睡眠、テレビ、ゲーム、インターネット等にも長時間を費やしており、学力層 A の児童生徒と比較して、学力層 D の児童生徒は読書の内容や質が異なる可能性がある。これについては質問紙の調査項目だけではこれ以上詳細に分析することは難しいが、児童生徒が計画的・効果的な読書活動を行えるよう、児童生徒への適切な読書指導が望まれる。

第 部 まとめ

児童生徒の読書活動と学習活動、学校の読書環境と指導方法という要因の中では、読書環境を除くすべての要因が教科の学力との関係を示した。その中から、いくつかの重要な知見を要約する。

読書好き

読書活動に関しては、読書好きであるかどうか教科の学力の様々な部分と強い関連を示し、その関係の強固さが明らかになった。

読書時間

平日の読書時間も教科の学力とは関係しているが、長時間の読書は必ずしも学力の高さには結びつかない。教科の学力が高い層ほど、小学校では 10 分以上 2 時間未満、中学校では 10 分以上 1 時間未満の読書を行う児童生徒の割合が多い。

また、学力層 A の読書好きの小学校の児童は、計画的に勉強している者ほど読書時間を長く確保しているが、中学生ではその傾向が弱かった。

さらに、学力層 D の長時間読書者は、テレビやゲーム等にも長時間費やしている者が多く、読書の内容・質を高めるための読書指導を行う必要があると考えられる。